

先日、校内初任者研修において。「特別活動」の演習をした。初任者のみなさんは、それぞれの教科があるが、共通項として、「特別活動」の演習をすることに大きな意味がある。それは、特活の優れた実践にAL授業のヒントが隠されているからである。

「特別活動」は、2つの活動と学校行事からなる。そして、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の3つの視点をもつ。2つの活動とは、「学級活動」と「生徒会活動」になるのだが、この時間は学校行事と比べ、何かを決める範囲が広く、私たちの指導力・支援力が問われる。クラスやグループで話し合うと「こんな見方もあるのか」「あいつ意外と深く考えているな」など相互理解が進み、視野が広がる。そう考えると「特別活動」を通して、教科の授業に波及していくことにも気付くと思う。「特別活動」は日本が世界に誇るべき教育活動と言われる。平成28年12月の中教審には、「『特別活動』に関する指導力は免許状がないことなどから、専門性という点では軽く見られがちであるが、本来、小中高のすべての教員に求められる最も基本的な専門性の一つである。」とある。私も自分のキャリアの中での実感としてそう思う。私はこれを『教科をこえた指導力』といい、それは、教科の授業改善につながり、生徒の学力も向上させることができる。もし、先生方が「私は〇〇が専門なので、それ以外は指導できません」と言った瞬間、自ら先生らしさを薄めてしまうことになることは自覚しておかなくてはならない。そこで、学校現場では、どのような取組が求められるのか？

学校という学びの場では、個人の意思決定や集団活動を通じた合意形成を求める場面は少なくない。生徒の今後のキャリアのために「自ら考え、判断し、決める」という主体性を育むことをどのように取り組むかということである。これは、なすことによって学ぶ「特別活動」を要として、様々な機会をつくり、働きかけ、揺さぶっていきたい。先生方も実体験があると思うが、一般的に中学生は、何かを決めるとき、学力の高い生徒がリーダー役となり、率先して決めていくことが多い。このことは、教師の中でも必要であると考えられている。大きな行事や学級での決め事は失敗したくないからである。実はこれは高校でも継続されている。気の利く生徒の発言のみがそのまま案となり、自らじっくり考えて、みんなでミーティングして、合意形成したり、新たな考えを生み出したりする経験の楽しさや充実感に気付かないまま大人になる。失敗していた方が成長できたのに、失敗せずに大人になる。そうすると未来を創造するなど難しいし、社会に出た後にチャレンジできず、仕事をやめたりするケースは多くなる。

こうしたことを念頭に告示文の総則には、「特別活動を要としつつ」という新たな表現が用いられた。そして告示文には繰り返し「見通しを立て、振り返る」活動が記されている。これまでも、この活動は多くの先生方が日常的に大事にしてきたことである。なぜなら、集団活動の効率が悪いと、学力、意欲の落差が大きく、集中力、一体感がなく、学び合いがない、当事者意識がない、建設的な相互作用がない、つまり、生徒の居場所にならないことを知っているからである。

今回の校内初任者研修の演習は「なそのマラソンランナー」というグループワーク。ちなみに前回は「もし子どもが…」という保護者会等で使えるグループワーク。どちらも学年歴は問わない。

キャンパスマスタープランのこと『みらいのカタチ』

本年度、学院として本格的に「キャンパスマスタープラン」が検討されることになりました。その中で、中高のリニューアルを優先させていくということで、中高校舎の順次建て替えを計画しているそうです。当然、財務シミュレーションや整備の優先順位等も検討しながらやっていくこととなります。

6月11日に財務理事、施設課部長・課長、中高事務長、そして、私、津留崎副校長、久家教頭で第1回ワーキンググループをしました。意見交換をしたものの、私は、このメンバーで新しい発想、今日的な発想はいまいちだと感じました。これは、私が言い出したことですが、将来構想のアイデアを“これからの先生たち”に聞いてみたいという話をしたところみなさん同感という結論になりました。

そこで先生方の中で、他校視察等を含めてアイデアを出してもらい、『みらいのカタチ』（どこかで聞いた笑）メンバーを私の方からお願いをしています。

『みらいのカタチ』メンバーは、川島（チーフ）、荒牧、小柳、西村先生です。他の先生方も何かアイデアがあればメンバーに話してください。ここで出たアイデア等は学院でまとめ、先のコンペの要望として反映していきます。